

「富岡敬明と 従弟中林梧竹」展図録

会期・平成十七年十一月十六日(水)～二十一日(月)
会場・山交百貨店五階催事場

主催 蕩墨書道會
後援 山梨県教育委員会 山梨県生涯学習推進センター
甲府市教育委員会 北杜市教育委員会 市川三郷町教育委員会
NHK甲府放送局 山梨放送 テレビ山梨 山梨日日新聞社
朝日新聞甲府総局 毎日新聞甲府支局 読売新聞甲府支局
協力機関 北杜市長坂郷土資料館 梧竹の会 山交百貨店



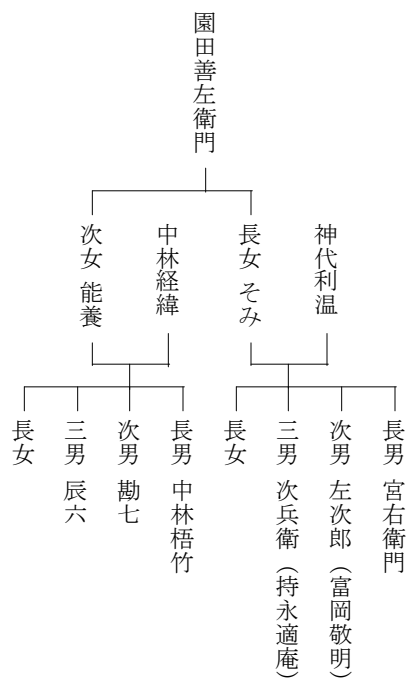
小林梧竹 (一八二七〜一九一三)

名は隆経、字は子達、通称彦四郎、号は梧竹・
 劍書閣主人也。幼児から書名高く漢学を草場佩
 川に学ぶ。十八才で江戸に留学し山内香雪の門
 に入る。三十才で帰藩、明治十一年から余元眉
 と親交、明治十五年北京に留学し潘存に学ぶ。
 明治二十四年王羲之の「十七帖」を臨書し天皇
 に献上。明治三十一年「鎮國之山」を揮毫し富
 士山頂に銅碑を建立。



富岡敬明 (一八二二〜一九〇九)

幼名は左次郎、字は九郎左衛門歌介のち敬明、
 号は耿介。佐賀藩の小城支藩士神代利温の二男。
 明治五年から八年まで山梨に滞在し、大小切騒
 動の収拾、日野原の開拓に貢献。明治九年から
 二十四年まで熊本県知事。明治二十四年から四
 十二年まで甲府(現善光寺町)に居住、明治三十
 三年男爵を授かる。書を小林梧竹、篆刻を四世
 浜村蔵六に学ぶ。



敬明の人生、

そして、残された日誌と自伝の紹介

北杜市長坂郷土資料館 学芸員 澤谷滋子



富岡敬明（とみおかけいめい 1822 - 1909）

はじめに

富岡敬明（一八二二・一九〇九）

九州は、佐賀県に生まれた。維新黎明期の明治五年、五十歳（以下満年齢）で山梨県権参事（副知事）として赴任し、「大小切税法」廃止に反対する農民騒動を収め、県令（知事）藤村紫朗の補佐として山梨の近代化をすすめた人物。私生活では、十七歳の甲府の女性と二番目の妻とし、その間に十二人の子を設け、山梨で初めて擬洋風の私邸を建築。熊本県令をつとめあげた後は、三年しか在任しなかった山梨を最終の棲家として選び、以後十八年、山梨の漢詩壇の嚆矢となった、県内ただ一人の男爵。明治維新を境に、前半生四十五年を「佐賀藩の武士」として、後半生四十二年を「明治新政府の地方役人」として生きてわけたが、敬明の漢詩の素養は当時の武人のたしなみを超え、その表現力は力強く、人をしてその膝元に十分に集わせるものであった。自分の人生を漢詩に託して懐古することも七十七歳で試みている。今でいう自己史である。

今回の紙面では、その書き残した日誌や記録を紹介したい。

敬明が生まれ育った 佐賀藩とは？

佐賀藩（鍋島藩・肥前藩）は、幕末に強力な洋式軍事力をつくりあげた鍋島閑叟（直正）の藩である。三十五万七千石。その支藩、小城藩が敬明の仕える藩であった。

七万石余の小藩でありながらも、維新後、新政府の地方役人になる者多く、本展示の敬明の従弟中林梧竹（一八二七・一九一三）も書家で立つ前は長崎県庁下級役人を短期間だが務めている。閑叟が維新政府の要職についたことから、その後援により、本藩からは、江藤新平、副島種臣、大隈重信などの明治の要人を輩出した。

江藤新平は敬明・梧竹と藩校をともにした人物で、脱藩して尊皇攘夷運動に加わり永塾居の身となったが、その江藤を寺に引き取り、面倒をみたのは、敬明であった。

佐賀藩士時代の敬明と 『丹心秘録 全』

維新のときの敬明は、実は、獄中にとらわれる身であった。

幼い小城支藩主を守るため、四十二歳の敬明は村崎六郎ら十七〜三十三歳の六名の藩士とともに、ある人物の暗殺を企てた。暗殺は未遂に終わったが、その責任をとり自首、死刑判決を受ける。しかし（有能なる）「敬明を殺すなかれ」の藩主閑叟の一声で、無期懲役に減刑。こ

れを「小城騒動」という。

のち維新による恩赦で獄を解かれ、明治政府の役人の道を歩むことになるが、獄を出てから敬明自らの手で認めたのが、『丹心秘録 全』である。これは小城騒動の裁許の詳細を裁判時の問答をまじえながらまとめた和綴本三百頁にわたる記録である。

後述する自伝『雙松山房詩史 一』のなかで、家禄をすべて失うことになった「小城騒動」のことを、子孫に向けて次のように書き残している。

「…私が罪人となり家を滅したのは、一片の真心から出たもので、止むを得ない余儀ない気持ちであり、それが忠であるのか不忠であるのかは子孫が自分で判断すべきことであり、自分で弁明することはしない。」（原漢文）

能吏としての敬明と 『富岡氏系譜』

ところで、敬明は、江戸詰め期間が長い。

小城支藩の江戸屋敷は今の新橋駅近くだったが、小城より江戸までは片道歩いて三十日。二十一歳で初めて江戸に詰め四十に至るまでの間、幾たびか往復している。中林梧竹も同様、江戸に出、書の研鑽をつんでいる。藩士時代は、旧記の方、目付役、留守居役、文武方指南役等としての能力が発揮されていたようである。のちに『富岡氏系譜』（十代敬明に至るまでの系図）を書き残しているが、その緻密できまじめな筆

使いは能吏としての一面を見せてくれる。

山梨での敬明と 『百姓騒擾略日誌』

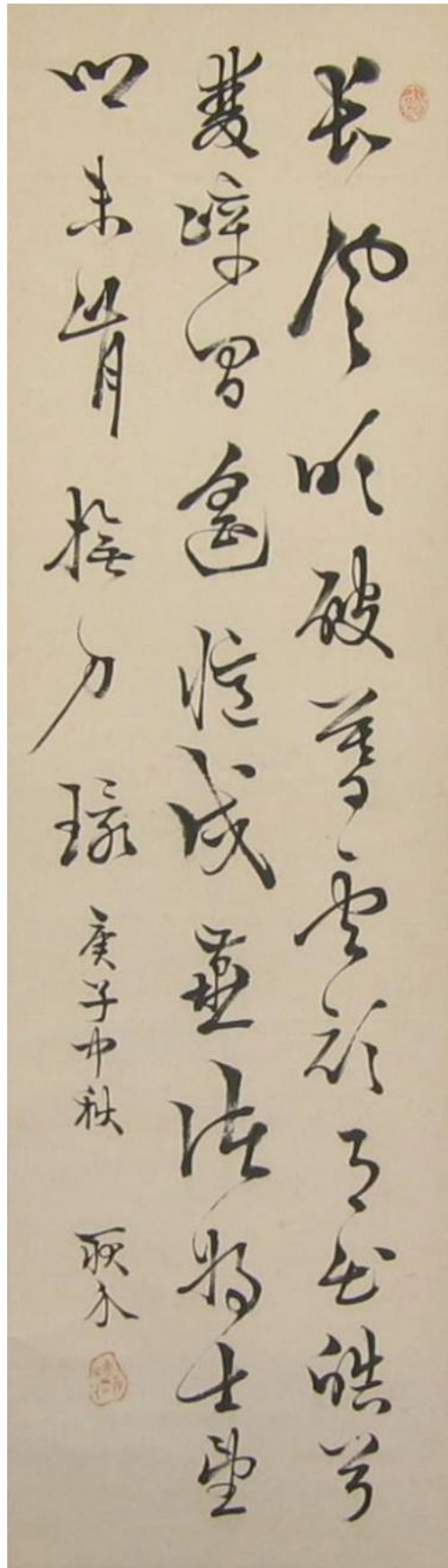
さて、かような人物がなぜ山梨県に？ という話だが、獄を出た敬明は佐賀藩権参事として、中央から派遣された山岡鉄舟（一八三六・一八八八）とともに藩内の抗争を解決。その後、藩主が北海道開拓長官をつとめていたこともあり、開拓使として北海道に渡るべく品川沖に停泊していた。その折り、突如、山梨への赴任が決定されたのである。

当時の山梨は、税制にメスが入れられようとしていた時期。大小切税法という甲州独自の農民に有利な税法は、江戸時代末より幕府から廃止がもたらめられていたが、農民の反対が強くなかなか廃止されずにいた。新政府になっていよいよ本気で取り組むべくの情報に、甲州の農民は殺気立っていた。県令は土肥実匡。そこに送りこまれたのが敬明であった。

このページの続きは図録にてご覧下さい。

【問い合わせ先】

〒四〇九・三六〇一
山梨県西八代郡市川三郷町市川大門二〇・四
中込 鯨（ナカゴミカズ）
電話 〇五五・二七二・二〇三九



115.0×33.0



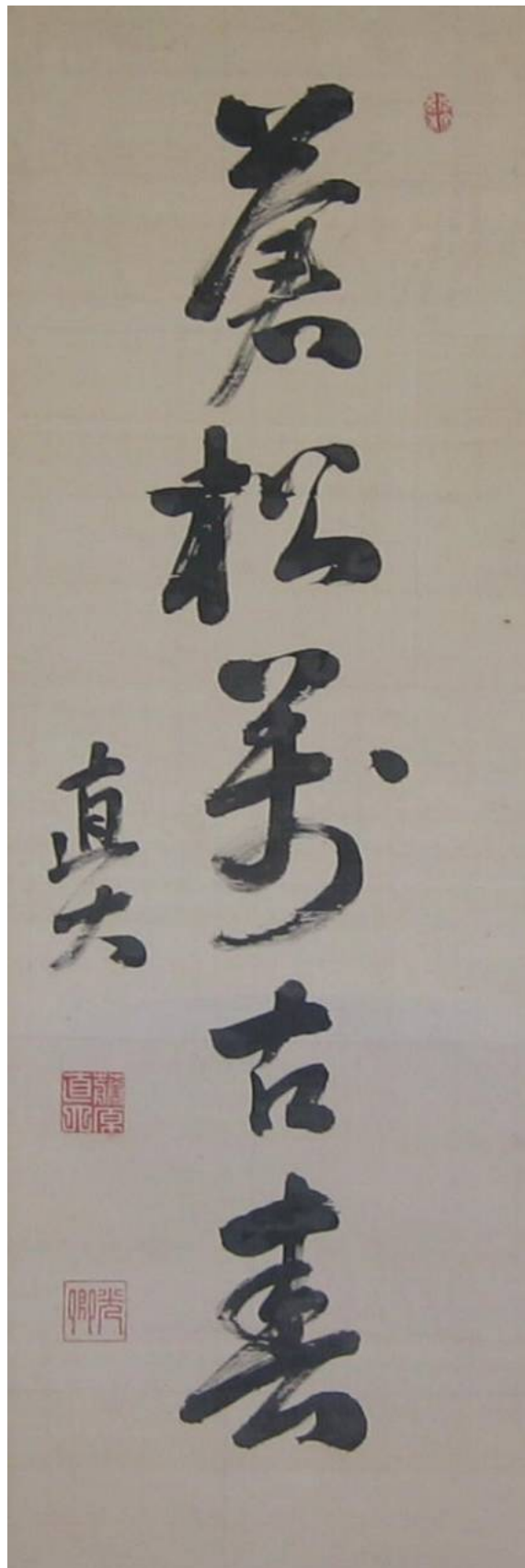
169.5×90.5



33.5×138.5



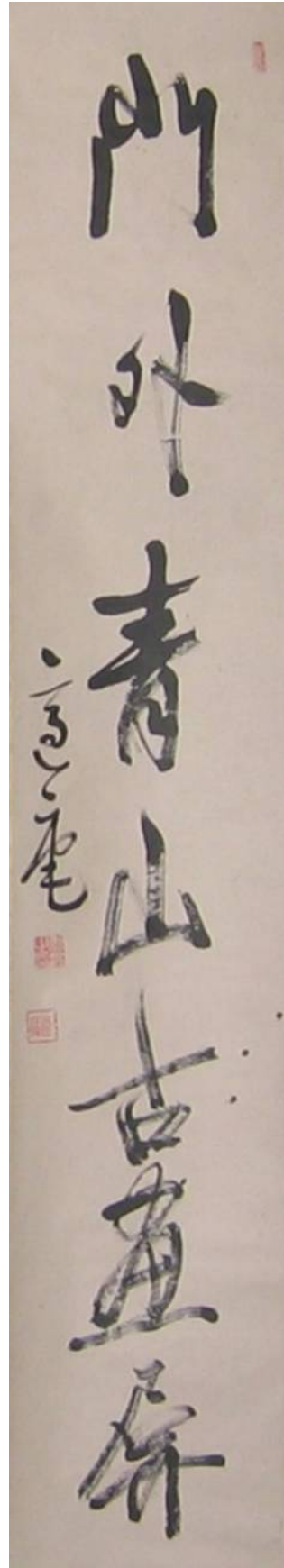
30.0×132.3



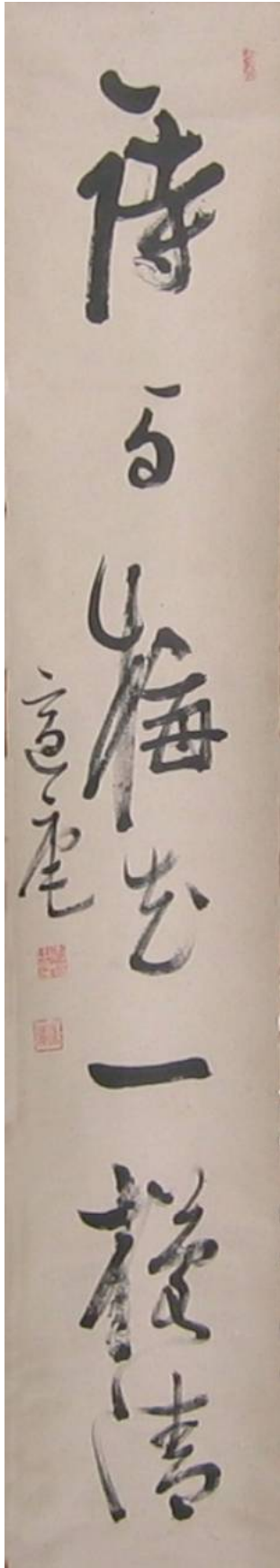
鍋島直大^{なほひろ}（二八四六・一九二二） 佐賀藩主、閑叟（直正）の第二子。

116.0×39.0

持永適庵（一八三一 - 一九〇二） 名は秀貫。敬明の弟、小城櫻岡小学校初代校長。



113.0×20.0



113.0×20.0

※敬明の遺品ではないが関係から掲載

富岡末雄（二八九〇・一九六九） 敬明の十男。上海の東亜同文書院を卒業、住友本社に勤務。



※敬明の遺品ではないが関係から掲載

133.0×46.0

渡邊青洲（一八四〇・一九一三） 名は信。市川大門初代村長、青洲文庫を建立。長男の妻は敬明の五女本。



136.7×51.5

渡邊雪峰（一八六八・一九四九）

名は精次。一八七三年から下吉田に帰住。日本画家、吉田芭竹の書壇院顧問。一九〇二年から東京麴町に住む。



雙松山房之図

賛 富岡敬明

148.2×67.5

足達疇邨
從三位勲三等富岡敬明之印



足達疇邨
雙松山房



富岡敬明

足達疇邨
雙松山房



敬明之印

足達疇邨
乾坤不老青山色日月萬古不停轉



兄弟山下樵長

富岡敬明	年 代	中 林 梧 竹
佐賀藩小城支藩士神代利温の次男に生まれる	1822(文政5)	
	1827(文政10)	小城町中林経緯の長男に生まれる
富岡家の養子となる	10歳 1832(天保3)	6歳 某神社の額面に三大字を書き、直堯公に認められ米百俵を得た(一説に10歳とも)
富岡津和(18歳)と結婚	16歳 1838(天保9)	
佐賀藩小城支藩鍋島直亮公に仕える	21歳 1843(天保14)	
	1845(弘化2)	18歳 江戸へ東上、書を山内香雪に就く
直亮公より名刀「不動丸」を賜る	37歳 1858(安政5)	
小城騒動がおこる、太田蔵人を暗殺未遂、自首し獄にとらわれる	42歳 1864(元治元)	
暗殺首謀者として死刑判決、特赦により終身禁固	44歳 1866(慶応2)	
	1867(慶応3)	40歳 長崎で林雲達 ^{りんうんき} に書法を問う
明治維新により恩赦、佐賀藩に仕える	47歳 1869(明治2)	
北海道赴任のため品川沖に停泊中、山梨権参事に任命される 大小切騒動おこる 大小切騒動のリーダー二人絞首刑となる	50歳 1872(明治5)	46歳 一説に上海に航り、画を胡公寿に学ぶとある
藤村紫朗、権令として赴任 日野原の開拓をすすめる	51歳 1873(明治6)	47歳 林雲達に「この世の不滅の巧を残した者…」と評される
日野春養蚕場(2階建)完成 5村合併、日野春村ができる	52歳 1874(明治7)	48歳 佐賀の乱勃発
名東県(現徳島県)に転出	53歳 1875(明治8)	
熊本県令となる	54歳 1876(明治9)	
西南戦争において、谷干城らと熊本城に50日間籠城する	55歳 1877(明治10)	51歳 西南戦争おこる 母能養歿、70歳
	1878(明治11)	51歳 余元眉と接触あり(推定)
	1882(明治15)	55歳 長崎から上海に出航
熊本県三角港をつくる 山梨県に本籍を移す	62歳 1884(明治17)	57歳 北京から長崎へ帰港、一行熊本に敬明を訪問 東京銀座の伊勢幸に入居(29年間僑居)
熊本県知事を退官 貴族院議員になる 山梨県里垣村(現甲府市)に帰る	69歳 1891(明治24)	64歳 明治天皇に王羲之の臨書を献上、御衣を賜る

富岡敬明	年代	中林梧竹
大小切騒動処刑者「小澤島田貳氏之碑」を建立(敬明、てん額揮毫) 貴族院議員をやめる	70歳 1892(明治25)	
	1894(明治27)	67歳 九鳥と号す(揮毫中の紙の上を鳩が歩き、その足跡から号す)
熊本県三角港に敬明をたたえる碑ができる	74歳 1896(明治29)	
	1897(明治30)	70歳 上海へ出航(二ヶ月)
	1898(明治31)	71歳 富士山頂に銅碑「鎮國之山」を建立
「雙松山房詩史 一」発行	77歳 1899(明治32)	
男爵となる	78歳 1900(明治33)	
	1908(明治41)	81歳 三日月堂・梧竹村荘を建立
2月28日夕刻、肺炎により、愛妻コトに看取られ、甲府で没する	87歳 1909(明治42)	
	1913(大正2)	86歳 小城梧竹村荘にて没する

※年令は満年齢による



幕末の肥前国小城鍋島藩邸付近(現在の佐賀県小城市)
 ※ただし、三日月堂・梧竹村荘は明治四十一年建立